

# 大島眞木先生ご退任にあたって

白石喜彦

大島眞木先生が定年で退職されるにあたり 2004 年度最後の学科会で述べられた挨拶は、「38 年間、真面目に、よく働きました」で始まった。1967 年に短期大学部専任講師に着任されたときは 30 歳だったわけである。私が同じ職場に来たのは 1980 年だったので大島先生の着任当時の姿は知らないが、若さあふれるきびきびした授業をされて学生に人気があったことは、ご本人の回想（当時の「エンマ帳を眺めていると（中略）牟礼のはじめの頃の若々しい緊張」が「よみがえ」ってくる——『牟礼キャンパスの二十三年』）を読んでも、当時学生だった者の回想（「あこがれの篠塚（大島）先生」に茶道部顧問をお願いしたので「二年生の時は、一週間、仏語の予習に追われ」た——同前）を読んでも想像がつく。時折、ご自分の授業を済ませての感想（今日はだいぶ進んだ、とか、時間が足りない、とか）を私に語られるときがあり、授業に対する大島先生の真摯な姿勢をそのつど感じたが、着任当時の姿勢を 38 年間ずっと保ちつけて来られたことになる。退職前数年の大島先生は、フランス語授業での今の学生の学力不足や自分が語る話が学生に通じなくなったことを嘆じられることもあったが、これは、学生を鍛えようとの熱意が一貫して変わらなかったことを示すもの、と私は理解した。大島先生が学生時代から学び取って来られたものと今の学生が学んでいるものとの違いは、文化的背景がすっかり変わってしまった事情を思えば、やむを得ないことであろう。それでも、学生として身につけておくべき教養のレベルを提示する姿勢を持続して来られたのだった。前記挨拶中の「真面目に、よく」やったという言葉には、上記の意味が含まれている。

学部・大学運営の役職にも「真面目に、よく」尽くされたのであった。学科主任を二度（短期大学部教養科・現代文化学部地域文化学科）勤められ、以下、就任順に記すと、入試運営委員長、教務委員長、学部長補佐、比較文化研究所所長（それ以前にも副所長を二度）、大学院現代文化研究科議長を次々と勤められた。これほど多彩な役職に就かれたことそのものが、学校運営面での大島先生の能力に皆が信頼を寄せていたことを示していよう。大島先生がそれぞれの役職にあるとき私はとくにそのことを意識することもなく安心してお任せしていた次第であったが、本年 4 月から地域文化学科主任としてさまざまな問題におろおろする身となって、これらの仕事をされてきた大島先生の偉大さを思い知ることになった。ある部署の長は、それが誰であるのか意識させることなく淡々と懸案処理にあたるのが極意であることを私は学んだのである。

大島先生からは、自分(たち)が基礎をつくりあげてきた学科の基盤の上に立っているのだから今の学科主任など楽なものよ、と叱責の声が聞こえてきそうな気がする。これらの役職にあったときの大島先生の仕事として、ご本人もいちばん気に入っておられるのは、比較文化研究所所長として同研究所 40 周年記念講演会(1994 年)に、ドナルド・キーン氏(日本文学研究者)と芳賀徹氏(比較文化研究者)を招いたことであつた。このときは会場(本学講堂)に聴講者が文字どおりあふれた。自分が企画した講演会に聴衆がどれくらい来てくれるかは誰しも気になるところであるが、このときの企画者としての喜びと満足はこの上ないものだったにちがいない。

大島先生の最後の講義(近現代日本文化論Ⅱ)の題目は「世界の中の谷崎潤一郎」であつた。谷崎潤一郎は大島先生が大学院生のときから研究対象としている作家の一人で、谷崎潤一郎関係の論文が多数ある。ほかには芥川龍之介・夏目漱石・森鷗外関係もあり、これら日本近代文学史の巨人たちと取り組んで来られた。東京大学大学院で比較文学比較文化を専攻されたことから、これらの作家のフランス文学とのかかわりを視点にしたものが多い。谷崎潤一郎という、欧米文学とは無縁に独自の日本的感性を切り拓いてきたと一般には見られている作家が、実はフランス文学をよく吸収して初期作品の世界を創りあげていることを大島先生は明らかにされたのであつた。そうした功績の積み重ねがやがて、フランスでの谷崎作品仏語訳に参画するという大きな仕事へつながつた。

プレイヤッド叢書(フランス、ガリマール書店)が谷崎潤一郎作品計 42 編の仏語訳を収めて、ヨーロッパにおける谷崎評価を決定的に印象づけたのは 1997~98 年のことであつた。その完成に大島先生は貢献されたのだった。翻訳・注・解説にかかわる、フランス人翻訳者の疑問に答える、という役割である。たとえば谷崎作品に出てくる日本で発売されていたカタカナ名の医薬品の綴りを調べる、などという厳密な調査を必要とする仕事である。当時存在しても現在では製造されていない医薬品が多く、根気のいる仕事であつただろうと推測される。また、上記叢書に付された注は日本人研究者にとつても参照すべき内容を含むと評価されている。これも例をあげれば、小説中に出てくる書道用品店が実在するか架空のものかあるいは仮名か、困難な疑問を辛抱よく解決に導かれた(結局、実在する店を仮名にしたということがわかり、谷崎の創作方法の一端が明らかにされた)。大島先生の谷崎潤一郎作品への通曉は世界の最先端に位置することはこれらをもって知られる。大島先生がプレイヤッド叢書の企画への参加を慫慂されたのは、ご自身の谷崎潤一郎研究が高く評価されていたからにはほかならない。翻訳についての谷崎潤一郎の考え方は、「西洋人の方から進んで日本語や日本文学を研究し、彼等の手に依つてそれらのものが彼等自身の国土へ紹介されるのでなければならぬ」(「饒舌録」)、日本文学は「西洋人には難解であるが、それでもそれが価値のあるものである限り、私はきつと理解される時が来ることを信ずる」(同前)というものであつたが、プレイヤッド叢書は、谷崎の翻訳論の実現でもあると大島先

生は考え、すすんで協力の手をさしのべられたのであろう。それは、大島先生の研究の一大成果でもあったことになる。研究者として至福の時を味わわれたことであろう。大島先生はまた、別の論文で、フランス映画「めぐり逢う朝」（アラン・コルノー監督 1991 年）がプロットを今昔物語の蟬丸伝説に、その映像美を 17 世紀フランス・オランダ絵画ばかりでなく谷崎潤一郎「陰翳礼讃」と溝口健二監督「雨月物語」にも負っていることを明らかにし、フランス映画が日本文化を摂取している実態を解明している。すぐれた映画論であるとともに、日仏文化交流の進展を率直に喜んでおられる。大島先生の研究のスケールは大きい。38 年間の長きにわたって「真面目に、よく」研究をつづけられて到達した境地である。